

6 3 6 1 - 8 9 4  
平成 1 9 年 1 1 月 2 8 日

各関係機関の長  
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 1 9 年度病害虫発生予報第 8 号について  
平成 1 9 年度病害虫発生予報第 8 号を発表したので送付します。

## 平成 1 9 年度病害虫発生予報第 8 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

### 発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載 ページ
施設果菜類	病害一般	-	2
	タバココナジラミ類	やや多	2
冬春キュウリ	べと病	並	2
	うどんこ病	並	3
	褐斑病	やや少	3
	灰色かび病	並	3
	黄化えそ病 ( M Y S V )	-	3
	ミナミキイロアザミウマ	並	3
冬春ピーマン	斑点病	やや多	3
	うどんこ病	並	4
	黒枯病	前～前々年より多い	4
	アザミウマ類	やや多	4
冬春トマト	葉かび病	並	4
	トマト黄化葉巻病 ( TYLCV )	前年と同程度	4
	タバココナジラミ類	やや多	5
	ハモグリバエ類	並	5
冬春イチゴ	うどんこ病	やや多	5
	ハダニ類	多	5
	アブラムシ類	並	6
カンキツ類	ミカンハダニ	並	6
チャ	カンザワハダニ	並	6

注意報を発表

11月中旬の冬春キュウリは収穫初期、冬春ピーマンは収穫期、冬春トマトは収穫前～初期、冬春イチゴは収穫前、温州みかんはほぼ収穫終了、茶は秋整枝後であった。

### 1 2 月の気象予報

平年と同様に晴れの日が多い、寒暖の変動が大きいと予想されています。

( 3 か月予報 鹿児島地方気象台 1 1 / 2 2 発表 )

## 発生予報の根拠および防除対策

### 施設果菜類

#### 1 病害一般

[ 防除上の注意 ]

- 1) 長期予報によると、平年と同様に晴れの日が多い、寒暖の変動が大きいと予想されているので、気温の変化等には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

コスト低減のため、夜温を低めに管理したり、ハウスサイドや内ホ口を多重被覆するなど様々な対策が取り組まれているところでは、施設内が多湿になりやすく、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意する。また、多発してからは防除効果が劣るので初期防除を徹底する。

キュウリ：べと病、褐斑病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病など

#### 2 タバココナジラミ類（*タバココナジラミイタイト* Q、*シルバーリーフコナジラミ*）（やや多）

[ 予報の根拠 ]

- 1) 冬春キュウリでの発生面積率 66.6%（平年 28.6%）は平年よりやや多、百葉当たり虫数 2.7 頭（平年 2.6 頭）は平年並である。
- 2) 冬春トマトでの発生面積率 71.3%（平年 35.1%）は平年よりやや多、百葉当たり虫数 7.9 頭（平年 2.5 頭）は平年より多である。
- 3) 冬春ピーマンでの発生面積率 26.7%（H18 61.5% H17 38.5%）は過去 4 年平均（40.9%）より少ない。

[ 防除上の注意 ]

- 1) タバココナジラミ バイオタイプ Q とシルバーリーフコナジラミの形態上の差異は成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での識別は困難である。
- 2) 施設栽培では防虫ネットを必ず設置するとともに、光反射マルチや近紫外線カットフィルム、黄色粘着板等の物理的防除手段を利用する。
- 3) タバココナジラミ バイオタイプ Q に効果のある殺虫剤が少ないことから、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- 4) 有効な薬剤に対する抵抗性の発達を回避する観点からも同一薬剤の連用は極力行わず、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発達の可能性が低いポタニガード乳剤等の微生物農薬や粘着くん液剤等のコナジラミを物理的に窒息死させる薬剤を防除体系に組み込む。

### 冬春キュウリ

#### 1 ベと病（並）

[ 予報の根拠 ]

- 1) 11月中旬の発生面積率 38.1%（平年 28.9%）、発病葉率 2.2%（平年 3.6%）はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 湿度が高いときには多発しやすく、多発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- 2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

#### 2 うどんこ病（並）

[ 予報の根拠 ]

- 1) 11月中旬の発生面積率52.4%(平年42.0%)は平年よりやや多、発病葉率2.6%(平年5.0%)は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 耐性菌を生じやすいので、同一系統薬剤の連続散布を避ける。
- 3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

### 3 褐斑病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の巡回調査では発生未確認(平年13.8%)である。
  - 2) 向こう1か月の長期予報では、平年と同様に晴れの日が多いと予想されている。
- [防除上の注意]
- 1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
  - 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。
  - 3) 下葉の老化した発病葉はほ場外に持ち出し処分する。

### 4 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の巡回調査では発生未確認(平年の発生面積率2.0%)である。
  - 2) 向こう1か月の長期予報では、平年と同様に晴れの日が多いと予想されている。
- [防除上の注意]
- 1) 曇雨天が続く時は、日中でも加温機を稼働させるなど除湿に努める。
  - 2) 発生初期の防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

### 5 黄化えそ病(MYSV: Melon yellow spot virus)

平成19年度病害虫発生予察注意報第8号(11月27日発表)参照

[予報の根拠]

- 1) 平成17年に初発確認後発生がみられなかったが、10月下旬以降、一部の地域で数例の発生が確認されたことから、今後、厳重な警戒が必要である。
- 2) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬されるため、発生後は急激に圃場内外に蔓延し、定着するおそれがある。

[防除上の注意]

- 1) 媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除を特に徹底する。

### 6 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の巡回調査では、21圃場のうち4圃場で微発生(葉当たり0.5頭以下)が確認された。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。
- 2) 黄化えそ病(前記)を媒介するので、早期発見に努め、防除の徹底が必要である。

冬春ピーマン

### 1 斑点病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の発生面積率13.3%(平年24.6%)は平年並、発病葉率1.1%(平年0.4%)は平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件では発生した場合の被害も大きくなるので、除湿に努める。

2) 病原菌が侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

## 2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

1) 11月中旬の発生面積率40.0%(平成41.8%)、発病葉率1.9%(平成3.4%)はいずれも平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- 2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので早期発見に努め、発病を確認したら早めに防除する。

## 3 アザミウマ類 (やや多)

平成19年度病害虫発生予察注意報第9号(11月27日発表)参照

[予報の根拠]

1) 11月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率73.3%(平成47.7%)は平成よりやや多、10花当り寄生虫数5.2頭(平成1.6頭)は平成より多である。

2) 11月中旬のヒラズハナアザミウマの発生面積率20.0%(平成29.5%)は平成並、10花当り寄生虫数0.4頭(平成2.3頭)は平成よりやや少である。

[防除上の注意]

1) ミナミキイロアザミウマは10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底する。

## 4 黒枯病 (前年~前々年より多い)

平成19年度病害虫発生予察注意報第10号(11月27日発表)参照

[予報の根拠]

1) 11月中旬の発生面積率40.0%(H18年0.0% H17年25.9%)は前年、前々年より多い。

[防除上の注意]

- 1) ほ場内が多湿にならないよう換気に努め、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- 2) 多発してからでは防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおく。
- 3) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。

## 冬春トマト

## 1 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

1) 11月中旬の巡回調査では発生未確認(平成の発生面積率2.8%)である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

## 2 トマト黄化葉巻病(TYLCV) 前年と同程度

[予報の根拠]

1) 11月中旬の巡回調査では2ほ場で発生が確認されたが、いずれも微発生(発生株率0.5%未満)であった。

発生面積率 0.00%(H18 8.3%、H17 46.2%)

発病株率 0.02%(H18 0.1%、H17 1.9%)

- 2) 栽培初期に発病し抜き取り処分した圃場が散見されるので注意する。
- 3) 病原ウイルスを媒介するタバココナジラミ類は平成よりやや多い傾向である。(次

項参照)

[ 防除上の注意 ]

- 1) タバココナジラミ類の防除を徹底する。(次項参照)
- 2) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き去り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

### 3 タバココナジラミ類 (タバココナジラミ、タバコナジラミ、タバコナジラミ) (やや多)

[ 予報の根拠 ]

- 1) 11月中旬の発生面積率71.3%(平年35.1%)は平年よりやや多、百葉当たり虫数7.9頭(平年2.5頭)は平年より多である。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 施設開口部に防虫ネット(0.4mm以下)等を設置して飛来防止に努める。
- 2) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 3) 発生を確認したら早めに防除する。なお、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- 4) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。

### 4 ハモグリバエ類 (並)

[ 予報の根拠 ]

- 1) 11月中旬の発生面積率35.7%(平年37.0%)、寄生葉率1.7%(平年2.1%)はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 多発してからの防除効果は低いので初期防除に努める。

## 冬春イチゴ

### 1 うどんこ病 (やや多)

[ 予報の根拠 ]

- 1) 11月中旬の発生面積率42.9%(平年21.3%)は平年より多、発病葉率5.7%(平年3.3%)は平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きほ場内に放置しない。

### 2 ハダニ類 (多)

[ 予報の根拠 ]

- 1) 11月中旬の巡回調査では発生面積率78.6%(平年26.5%)、寄生株率29.6%(平年7.5%)はいずれも平年より多である。
- 2) 前月下旬の注意報(第6号)を発表以後、発生面積率は横這いであるが、寄生株率は増加傾向にある。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 収穫期に寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。莖葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

- 3) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤の口 - テ - ション散布を実施する。

### 3 アブラムシ類 (並)

[ 予報の根拠 ]

- 1) 11月中旬の発生面積率35.7% ( 平年27.0% )、寄生株率3.6% ( 平年3.9% ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 開花期に薬剤を使用する場合は十分注意し、ミツバチに影響の少ない薬剤を寄生株とその周辺に部分散布する。  
2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

## カンキツ類

### 1 ミカンハダニ (並)

[ 予報の根拠 ]

- 1) 11月中旬の発生面積率45.0% ( 平年46.0% ) は平年並、寄生葉率3.1% ( 平年10.1% ) は平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 冬季のマシン油乳剤の防除効果は高いので実施する。  
2) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤の口 - テ - ション散布を実施する。

## チャ

### 1 カンザワハダニ (並)

[ 予報の根拠 ]

- 1) 11月中旬の発生面積率30.8% ( 平年39.9% )、寄生葉率0.9% ( 平年2.5% ) はいずれも平年並みである。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤の口 - テ - ション散布を実施する。

### その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。  
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>  
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>  
農薬検査所ホームページ <http://www.acis.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤 ( 商品名、マリックス乳剤、粒剤等 ) は使用しないこと。
- 3 発生量 ( 程度 ) の区分
- |     |    |       |     |                     |
|-----|----|-------|-----|---------------------|
| 多   | い  | ( 高   | い ) | やや多いの外側10%の度数の入る幅   |
| やや多 | い  | ( やや高 | い ) | 平年並の外側20%の度数の入る幅    |
| 平年並 |    |       |     | 平年値を中心として40%の度数の入る幅 |
| やや少 | ない | ( やや低 | い ) | 平年並の外側20%の度数の入る幅    |
| 少   | ない | ( 低   | い ) | やや少ないの外側10%の度数の入る幅  |
- ( 平年値は過去10年間の平均 )

#### 4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- 1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- 2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

**お知らせ** (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

#### 【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 櫛間

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp